

「農耕牧畜の時代」の狩猟具 —新石器時代の尖頭器をめぐる—

三宅 裕*

Hunting Tools in the Age of Farming:
Observations on Projectile Points in Neolithic Southwest Asia

Yutaka MIYAKE

先土器新石器時代に盛行する尖頭器は、次第に大型化し装飾性を強めていく傾向が認められる。北西シリアでは、大型の尖頭器が土器新石器時代になっても継続する。しかし、この時期、狩猟活動自体は家畜化の進展とともに低調となり、尖頭器を実用的な狩猟具とだけ考えたのでは、その現象をうまく説明することはできない。ナヴィフォーム式石刃製作技術は尖頭器の素材を得ることが主な目的であったとされ、良質な石材が選択されるなど、尖頭器の製作には大きなコストがかけられている。PPNB期を中心とする時期の尖頭器は、狩猟者としてのアイデンティティとも深く係わる、社会的・象徴的な意味の付与された道具であった可能性が高く、これは当時の社会が狩猟採集民社会の延長線上にあったことと関連していると考えられる。

キーワード：尖頭器、ナヴィフォーム式石刃製作技術、新石器時代の社会

Projectile points in the Pre-Pottery Neolithic in southwest Asia tended to become larger and more elaborately decorated over time. In northwest Syria, large projectile points were found throughout the following Pottery Neolithic period. Such projectile points are rather puzzling, if one assumes that they were solely used as practical hunting weapons, since hunting activities probably gradually deteriorated with the rise of farming in the Pre-Pottery and Pottery Neolithic periods. The substantial purpose of Naviform core blade technologies is thought to be the acquisition of blade blanks appropriate for use as projectile points. Selected use of high-quality flint and obsidian for the technologies also indicates that these were labor intensive activities, and show that the projectile points and their production were objects of social interest. It seems that the projectile points found around the PPNB period were bestowed with additional social and symbolic meaning that associated them with the hunter persona, whose symbolism is deeply related to the structure of societies derived from hunter-gatherer traditions.

Key-words: projectile points, naviform core technology, Neolithic societies

1. はじめに

西アジアの新石器時代は、「農耕牧畜による食糧生産が開始された時代」と定義されている。これは「石器の中に磨製石器が加わる」という、それまでの新石器時代の要件に物足りなさを感じていた V. G. チャイルド (Childe) の主張に基づくものであり (Childe 1934)、そこには生業のあり方が社会を大きく規定するという基本的な考えが反映されている。チャイルドも影響を受けていたマルクス主義的な唯物史観が広く浸透したことや「新石器革命」という刺激的な造語の妙もあり、こうした時代の定義は広く受け入れられることとなった。

しかし、新石器時代をこのように定義し直すことに

よって、別の不都合が生じるようになったことも事実である。まず、チャイルド自身も認識していたように、食糧生産の開始を認定することはそれほど簡単ではないという問題がある。栽培化や家畜化は長期に及ぶ過程であって (野澤・西田 1981)、特にその開始については資源管理あるいはプレドメスティケーションの問題もあり、どこかに簡単に線を引けるようなものではない。考古学的な時代区分という見地からすると、その開始を時代の要件としたのはあまり賢明なことではなかったのかもしれない。それは実際の時代区分のあり方を見れば、すぐに理解することができる。レヴァントを例に挙げるならば、新石器時代の始まりはナトゥーフ期に特徴的であった半月形細石器が

減少し、エル・キアム型尖頭器などの新しい型式の石器が出現することが指標とされている。結局のところ現在でも、新石器時代の始まりは石器の型式に基づいて区分されているのであり、本来の時代の定義は脇に置いておく「現実的な対応」がとられていることになる。

これは西アジアの新石器時代研究が抱える大きな矛盾ということになるが、実際にはやむを得ない面もあり、こうした「現実的な対応」を批判することがここでの意図ではない。むしろ、近年の調査の進展を受けて指摘しておきたいのは、チャイルドによる新石器時代の再定義によって農耕牧畜の意義が大きく強調されるようになったことの負の側面についてである。食糧生産開始の歴史的意義が繰り返し何度も強調されてきたことにより、私たちは生業の変化によって直ちに新石器時代の社会が大きく変容し、農耕牧畜を中心とする世界が形成されたと考えてしまっていないだろうか。

ギョベクリ・テペ (Göbekli Tepe) 遺跡をはじめとする南東アナトリアでの調査の進展により、食糧生産が開始される以前に、すでに複雑な社会が形成されていた可能性が高くなってきた (三宅 2017)。これは農耕牧畜だけが社会を変容させる要因ではないことを再認識させてくれただけでなく、生業と社会の関係についても改めて問い直すよう私たちに迫るものであり、農耕・牧畜開始の意義を過度に強調する姿勢に対しても再考を促すことにつながる。

本稿ではこうした課題を具体的に検討する材料として、新石器時代の尖頭器を取り上げてみたい。農耕牧畜の時代であるはずの新石器時代に、狩猟具である尖頭器が盛行するのは不可解な現象であるとの指摘は早くからあった (和田 1987)。確かに、従来の認識の枠組みの中では、この現象をうまく説明するのは難しいように思われる。一度、「新石器時代=農耕牧畜社会」という認識からある程度距離を置き、別の視角からアプローチしてみることは一定の意義があると考えられる。

2. 北西シリアの新石器時代

ここでは、筆者が新石器時代の社会と尖頭器の問題を考えるきっかけになった、北西シリアにおける新石器時代の状況をみてみたい。北西シリアに位置するエル・ルージュ (El-Rouj) 盆地では、筑波大学の調査団によって 1990 年代の初頭から息の長い調査が続けられてきた。1990~1992 年にかけておこなわれた第 1 期の調査では、盆地周辺の地形学的調査や現生の植生調査に加え、網羅的な遺跡踏査と 3 つの遺跡において試掘調査が実施された (筑波大学シリア考古学調査団編 1991、1992、1993、Iwasaki and Tsuneki

2003)。これらの調査で得られた資料を基にルージュ編年が構築され、特に土器新石器時代に相当するルージュ 2 期は、2a 期から 2d 期に細分されるなど、詳細な編年が組まれることとなった (Iwasaki et al. 1995)。1997 年からはテル・アイン・エル・ケルク (Tell Ain el-Kerkh) 遺跡を対象とした発掘調査が開始され、PPNB (Pre-Pottery Neolithic B) 前期に遡る層位の確認 (Tsuneki et al. 2006)、PPNB 後期の貯蔵施設の検出 (小高 2009)、土器新石器時代の集落内墓域の確認 (Tsuneki 2011) などの成果があった。

エル・ルージュ盆地では 37 のテル型遺跡が確認され、新石器時代の遺物が採集された 22 遺跡については、ルージュ編年に沿って詳細な遺跡分布の変遷が明らかにされるとともに、テル・エル・ケルク遺跡では発掘調査や試掘調査の結果に基づいて集落規模の推定がなされている (Tsuneki 2012)。その成果に沿って、エル・ルージュ盆地における集落のあり方やその変遷をまとめると以下ようになる。

エル・ルージュ盆地における最古の居住の痕跡は、ルージュ 1a 期 (PPNB 前期) まで遡る。この時期の層位はテル・アイン・エル・ケルク遺跡の北西発掘区において検出されているのみで、集落規模はかなり限定的なものであったとみられている。後続する PPNB 中期の遺跡や層位は確認されず空白期となっているが、ルージュ 1c 期 (PPNB 後期) になると突如規模の大きい集落が出現し、テル・エル・ケルク遺跡は 16 ha に達していたと推定されている。その後も同遺跡では継続して居住が営まれ、土器新石器時代前葉のルージュ 2a-2b 期では約 10 ha、同中葉のルージュ 2c 期では約 6 ha の規模であったと推定されている。徐々に縮小していく傾向にあるとはいえ、ルージュ 2c 期までは比較的大きな集落規模が維持されていたことがわかる。このほか、試掘調査のおこなわれたテル・アレイ (Tell Aray) 遺跡でも、土器新石器時代の層位が確認されており、テルの範囲や遺物の分布範囲などから 5 ha ほどの規模を有していたと考えられている¹⁾。この時期までのセトルメントパターンは、テル・エル・ケルク遺跡と、さらにテル・アレイ遺跡も加えた 1-2 基の拠点集落が存在し、ほかに 1-2 ha 程度の小規模な集落が複数分布する形であったとみられる。

ユーフラテス川中流域でも、PPNB 期にはアブ・フレイラ (Abu Hureyra) 遺跡のように 10 ha を超えるような規模の集落が知られており (Moore et al. 2000)、ほかにもテル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡、テル・ブクラス (Tell Bouqras) 遺跡など、比較的大きな集落が存在する。しかし、土器新石器時代に入る頃には大規模集落は姿を消してしまい、継続して居住が営まれる場合でも、1-2 ha 程度の規



図1 本稿で言及した遺跡

模に縮小する傾向が認められる。同様の傾向は南東アナトリアでも認めることができ、土器新石器時代の遺跡は概して小規模である。

北西シリアにおいて大規模集落がみられなくなる時期は、土器新石器時代後葉のルージュ 2d 期になってからである。この時期には、テル・エル・ケルク遺跡は 1 ha ほどになり、盆地内にもほかに拠点集落といえるような遺跡は見当たらない。確認されている遺跡数自体は比較的多いものの、小規模な集落が分散して分布する状況となる。PPNB 期から継続的に営まれてきた大規模な拠点集落が解体されたと評価することができ、集落や社会のあり方における大きな画期と捉えることができる。ユーフラテス川中流域などと比べると、現象としてはよく似ているものの、そのタイミングが大きく遅れていることになる。この時期には在地の暗色磨研土器の器形や装飾にハラフ土器の影響が認められるようになり (Tsuneki et al. 1997)、黒曜石もそれまで中央アナトリア産が中心であったものが、東アナトリア産の割合が顕著に増加するなど (前田 2010)、東方からの影響が認められるようになることも興味深いところである。

北西シリアの新石器時代のもうひとつの特徴として、土器新石器時代になっても大型の尖頭器とナヴィフォーム式石刃製作技術²⁾が継続して認められることがある。ユーフラテス川中流域、ハブール川上流域、

南東アナトリアなどでは、PPNB 期にはビブロス型を中心に大型の尖頭器が出土するが、土器新石器時代になると尖頭器はほぼ姿を消してしまう。それと同時にナヴィフォーム式石刃製作技術も見られなくなり、「場当たりの」と評されるような剥片を中心とするインダストリーへと変化する (Nishiaki and Le Mière 2005; Maeda 2011)。

エル・ルージュ盆地において、ナヴィフォーム式石刃製作技術はルージュ 1a 期においてすでに認められ、それを基盤として製作されたアスワド型尖頭器 (図 2: 1) も出土している (Arimura 2007)。PPNB 後期のルージュ 1c 期にはビブロス型、ウガリット型といった尖頭器が認められるようになり (図 2: 2)、土器新石器時代のルージュ 2a-2b 期になると (図 2: 3) それにアムーク型尖頭器も加わるようになる (Tsuneki et al. 1998)。この PPNB 後期から土器新石器時代前葉にかけて、石器製作のあり方にはほとんど変化が認められず、PPNB 期からの伝統が継承されていると評価することができる (Arimura 2019)。後続するルージュ 2c 期では引き続き尖頭器はみられるものの、アムーク型尖頭器のみとなる (図 2: 4)。石器製作技術においてもナヴィフォーム式石刃製作技術自体は継続しているが、それによって製作される道具は限定的になり、剥片を素材とした道具の割合が増加する。ルージュ 2c 期において認められた変化の兆

候は、続くルージュ 2d 期になるとより顕著なものとなる。尖頭器とナヴィフォーム式石刃剥離技術は完全に消失し、ここでも剥片を中心とするインダストリーへと変化する。PPNB 期的な石器製作伝統の終焉と評価することができる。

このように北西シリアの新石器時代の特徴は、PPNB 期の社会や物質文化を特徴づける大規模集落や尖頭器・ナヴィフォーム式石刃製作技術が土器新石器時代においても継続して認められることであり、土器新石器時代後葉のルージュ 2d 期になって大きな変化を迎えるところにあると言える。こうした現象は他の地域でも認められるが、それが生じたタイミングに違いがあったということになる。興味深いのは、集落規模の縮小（あるいは大規模集落の解体）という社会的な変動と尖頭器・ナヴィフォーム式石刃製作技術の消失という石器の変化が、多くの地域で連動しているようにみえることである。この両者については通常あまり関係があるとは思われないものだけに、単なる偶然の一致である可能性もある。しかし、尖頭器が単なる狩猟具ではなく、何らかの社会的意味をもった道具であったとしたならば、両者の関係性を検討してみる価値がでてくるように思われる。現状では、新石器時代の大規模集落の実態はまだ未解明な部分が多く、詳細な検討ができない状況にあるため、本稿ではそのための予察という意味も含め、尖頭器について検討してみることにしたい。

3. 新石器時代の尖頭器

西アジアにおいて尖頭器は先土器新石器時代の初頭から認められ、レヴァントを中心に東はシンジャール平原、北はタウルス山脈を越えた東アナトリア、西は中央アナトリアまで広範な地域に分布する。特に、PPNB 期においては、「大型石鏃インダストリー (Big Arrowhead Industries)」という呼称が提唱されたことがあるほど (Kozlowski 1999)、この時期を代表する特徴的な石器である。また、尖頭器は多くの型式に分類され、地域的な特徴や時期による変化も顕著であることから、地域間関係や編年に関する研究が盛んにおこなわれてきた (Gopher 1994 など)。

新石器時代の尖頭器の大きな特徴は、時期を経るにつれ大型化していく傾向にあること、押圧剥離による器面の調整が顕著になっていくことである。これまでに提示されているデータを基に、主な尖頭器の型式の長さを大まかな時代の変遷に沿って並べてみるならば、新石器時代初頭のエル・キアム型尖頭器は 22.0-39.5 mm、それに後出するヘルワン型尖頭器は 28.6-40.9 mm、さらに後続するビブロス型が 26.0-78.13 mm、イエリコ型が 26.0-78.13 mm、アムーク型が 32.0-74.25 mm

となっている (Gopher 1994: 294-297)。これは遺跡ごとに算出された平均値から最小値と最大値を採ったものであるので注意が必要であるが、全体として大型化していく傾向は読み取ることができる。ちなみに、テル・ハルラ遺跡出土のビブロス型尖頭器については、長さが 100 mm を超えるものも少なくなく、最大で 140 mm のものもあるというデータが示されている (Borrell and Štefanisko 2016)。

尖頭器の調整については、古い時期には縁辺部の急角度調整に限られていたものが、ある時期から押圧剥離によるものがみられるようになり、その調整が施される範囲も次第に拡大していく傾向にあることが知られている。実用的な狩猟具としての機能に、こうした押圧剥離による調整が大きく影響するとは考えにくく、むしろ装飾的な意味があった可能性を検討してみる必要もあると思われる。尖頭器が大型化していくこととセットで考えるならば、こうした変化は「過剰デザイン」化と評価することもでき (安斎 2008)、単なる実用的な狩猟具であったのではなく、社会的あるいは象徴的な意味の付与された特別な道具であった可能性が考えられるようになる。

これまで、新石器時代の尖頭器をめぐっては、実用的な狩猟具であることを前提に研究が進められてきたように思われる (Nishiaki 2000)。先端が尖り、茎を備える型式も多いというその形状や特に先土器新石器時代の前半には狩猟活動が盛んであったことから、そう考えられてきたのもっともなことではある。尖頭器の用途に関する研究もいくつかあるが、主に議論されているのは、それが矢に装着された石鏃であったのか、それとも投げ槍の先であったのかという点についてである。突き槍の可能性も含め、それらを判別する方法は、尖頭器の最大幅の部分の断面積 (TCSA³⁾) や外周長 (TCSP⁴⁾) を計測・算出し、北アメリカの民族事例において使用法が明らかな尖頭器のデータと対比して、その用途を推定するというものである (Hughes 1998)。西アジア新石器時代の尖頭器を対象にした事例をみても、エル・キアム型、ヘルワン型、イエリコ型、ビブロス型、アムーク型ともいずれも石鏃の範疇に納まるという結果が示された (Shea 2006)。その一方で、テル・ハルラ遺跡出土のビブロス型尖頭器を対象とした分析では、石鏃ではなく投げ槍の先であった可能性が高いとの結果が得られている (Borrell and Štefanisko 2016)。評価にこのような違いが生じた原因は、前者が Gopher 1994 に提示されているデータを基にしていることも考えられ、少なくともビブロス型尖頭器については一次資料を基にした後者のデータの方がより実態に近いと考えられる。

石鏃から槍先へと変化したという指摘は、尖頭器が

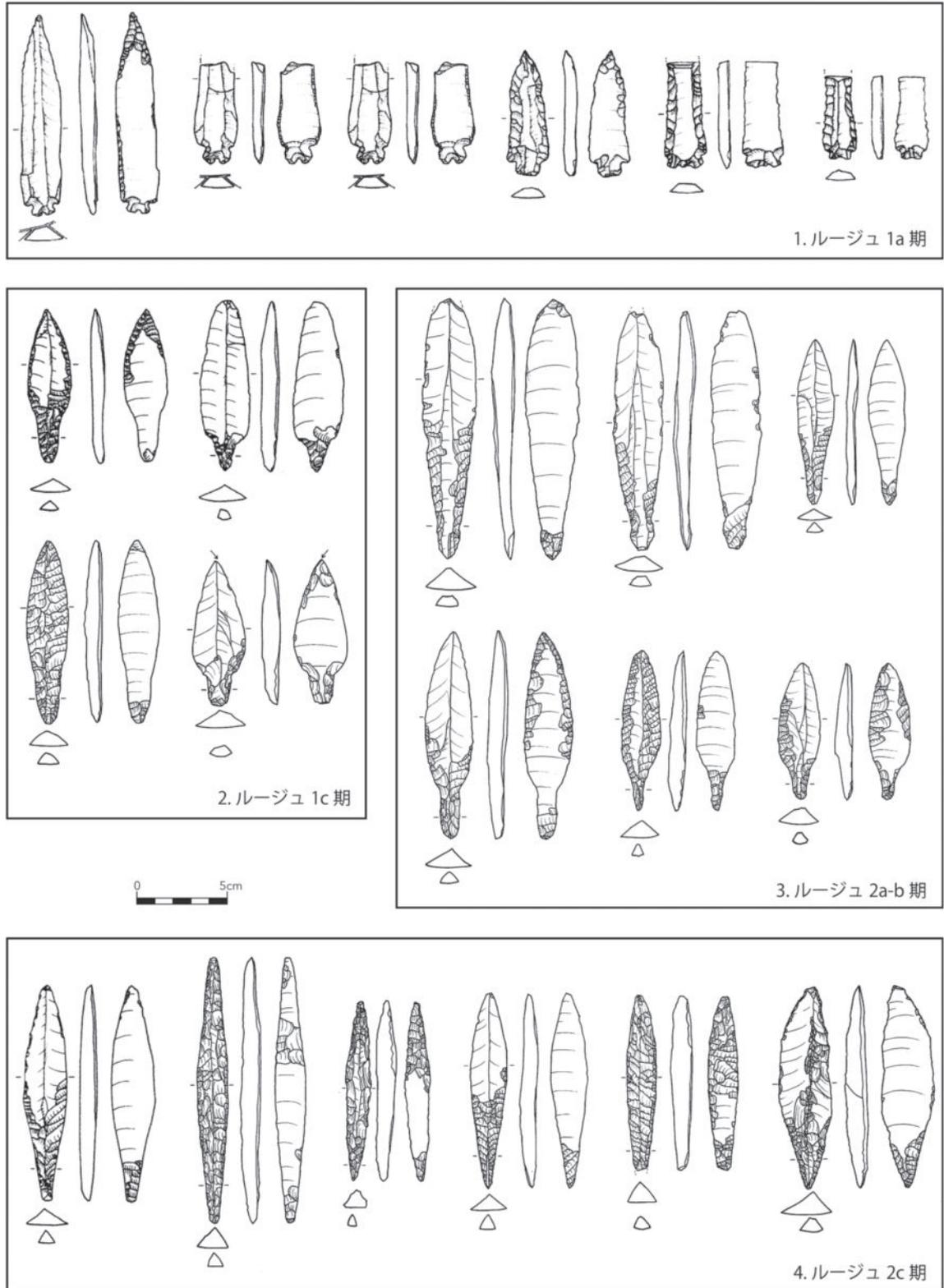


図2 テル・エル・ケルク遺跡出土尖頭器 (Tsuneki et al. 1998, 1999 より作成)

大型化する現象を機能的な面から説明したものととして一定の意義がある。しかし、なぜPPNB期を中心とする時期に狩猟具にこのような変化がおこったのか説明する必要が生じる。狩猟対象獣に顕著な変化がみら

れるのであれば、こうした解釈も可能になるかもしれないが、利用される動物に特に大きな変化があるわけではない。むしろ、家畜化の過程が進行している状況がうかがわれ、PPNB後期初頭には家畜型のヒツジと

ヤギが重要な役割を果たすようになったことが指摘されている⁵⁾ (Conolly et al. 2011)。

尖頭器の大型化を狩猟対象獣の変化と結び付けて考える解釈はこれまでもあったが (藤井 1996)、その場合は小型のガゼルから中型のヤギ、ヒツジ、野ロバへの変化に対応するのではないかと考えられていた。レヴァントではPPNB期においてガゼルからヤギやヒツジへと動物相が大きく変化することは事実であるが、ヒツジやヤギの場合、家畜として導入された可能性も考えなくてはならず (Martin and Edwards 2013)、単に狩猟対象獣の変化とは考えられない状況にある。また、ヒツジやヤギはもちろん、ウシのような大型動物であっても、小型の尖頭器しかないような時代に狩猟されていたことを示す資料もある。ティグリス川上流域の先土器新石器時代初頭の遺跡ハッサンケイフ・ホユック (Hasankeyf Höyük) では、動物資料の中で野生のヒツジ・ヤギが50%以上を占め、ほかにイノシシやアカシカも狩猟されていた (本郷 2018)。狩猟具であったと考えられる石器も多数出土しているが、不等辺三角形の幾何学形細石器 (図3:1-5)、葉状尖頭器 (図3:6-10)、ネムリク型尖頭器 (図3:11-13) などいずれも小型のものである (Maeda 2018)。また、同時期のキョルティック・テペ (Körtik Tepe) 遺跡では、野生のウシが約30%程度出土しているが (Arbuckle and Özkaya 2006)、尖頭器の構成にハッサンケイフ・ホユック遺跡と大きな違いは認められない。少なくともヤギやヒツジ程度の大きさの動物を狩猟するために、大型の尖頭器が必要であったとは考えにくい状況にある。

このように、尖頭器の変化と実際の狩猟のあり方がうまく対応していない状況を受け、尖頭器を狩猟具と考えるものの、食糧の獲得を目的としたものではない別の用途を想定する意見もある。家畜の群れを保有す

るようになったことで、それを狙う捕食動物から家畜を守る必要が生じ、尖頭器が盛行するのではないかと考える (Hodder and Meskell 2010)。しかし、家畜の群れを守ることでさえできれば十分であったはずであり、尖頭器を用いて捕食動物を仕留めることまでは必要とされなかったと思われる。この場合、何よりも尖頭器が大型化し、装飾性を強めていくことをうまく説明することができないという問題が残る。

このほか、尖頭器が対人用の武器であった可能性を探る考えもある (Bar-Yosef 2014)。日本列島においても弥生時代に石鏃が大型化する現象が認められ、対人用武器としての性格が論じられていることとよく似ている。ただし、弥生時代の場合は、高地性集落、環濠集落などの防御面を強く意識していると思われる集落の存在、受傷人骨の出土など、それを補強するような資料も多数得られている。西アジアの新石器時代の場合は、先土器新石器時代に組織的な戦闘があったことを示すような資料は認められず⁶⁾、出土人骨においても組織的な戦闘の存在を積極的に示すような事例は報告されていない。

4. 製作のあり方からみた新石器時代の尖頭器

新石器時代の尖頭器が単なる狩猟具ではなかった可能性は、それを製作する技術そのものや石材獲得のあり方の中にも見出すことができる。大型の尖頭器の製作と深く関係していると指摘されているのが、PPNB期を中心に盛行するナヴィフォーム式石刃製作技術である。この技術の特徴は、両設打面の石核から対向方向に交互に剥離を繰り返し、先端が尖り、左右対称で、反りの少ない石刃を製作するところにあるとされる。つまり、尖頭器の素材として適した石刃を得ることが目的であったと考えられている (Abbès 2003;

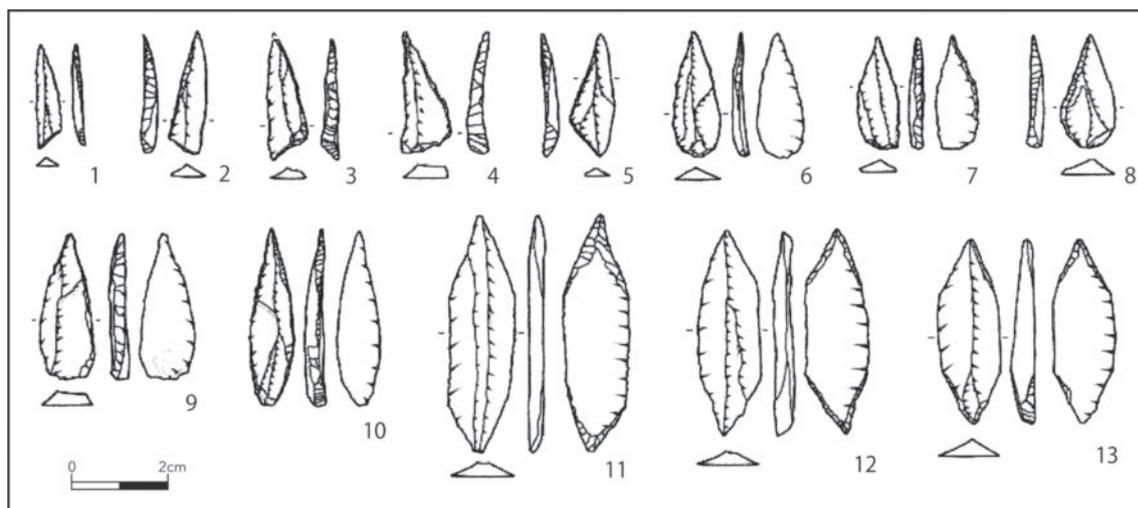


図3 ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土尖頭器 (Maeda 2018 より作成)

有村 2013)。そのために入念な準備をおこない、側面石刃や調整石刃を剥離して作業面を整えてから、目指す中央石刃が剥離される。したがって、中央石刃以外は基本的にすべて副産物であったことになる。中央石刃を利用してほかの道具が製作されたり、副産物を利用して石器が製作されることもあるが、あくまでもその第一義的な目的は尖頭器用の素材を得るところにあることが重要な点である。レヴァントや南東アナトリアにおいて、大型の尖頭器とこの石器製作技術の消長が一致しているのは、両者が表裏一体の不可分な関係にあったことをよく示している。

ナヴィフォーム式石刃製作技術では、チョコレート色のフリントなどとも通称される、良質な石材が選択的に利用されていることも特徴である (Quintero and Wilke 1995)。例えばエル・ルージュ盆地の場合、盆地周辺の石灰岩地帯に良質なフリントは産出せず、ラタキア近郊など遠隔地から獲得していたとみられる。わざわざ良質の石材を入手しておきながら、上述したようにナヴィフォーム式石刃剥離技術は、石材の利用の面からすると決して効率的であるとは言えないものである。この技術を基盤とした尖頭器の製作は、石材の利用効率をある程度度外視した、あえてその無駄を厭わないものであったと評価することができる。

こうしたあり方はフリントだけでなく、黒曜石製の尖頭器についても当てはまる。カッパドキア産とも称される、中央アナトリアの黒曜石の原産地では、PPNB 期に併行する時期の石器製作址が確認され、興味深い状況が明らかにされた。ギョルルダールの東方、キョムルジュの原産地付近に位置するカレテペ (Kaletepe) 遺跡は、原産地近くの遺跡らしく夥しい数の黒曜石が検出され、ナヴィフォーム式石刃製作技術とプリズム形石核を基にした石刃製作技術による石器製作がおこなわれていたことが確認された (Binder and Balkan-Atli 2001)。両者とも同時期のレヴァントでは一般的な技術であり、在地の中央アナトリアの石器製作技術とは大きく異なっていることも注目された。

ナヴィフォーム式石刃剥離技術に関連する遺物を見ても、長さ 15 cm 前後のナヴィフォーム石核、側面石刃、調整石刃は出土しているものの、目的とされていた中央石刃は失敗品以外認められない。中央石刃を中心に必要とするものだけが持ち出され、副産物の多くはそのまま遺跡に残されたと考えられる。中央石刃がこの場で尖頭器に加工されていたかどうかまでは不明であるが、原石や調整体の形ではなく、素材 (ブランク) や製品の形で黒曜石が流通するケースもあったことを示している。

この遺跡で作業をおこなった石器製作者について

は、レヴァントからアナトリア高原にやって来た外来者であった可能性が指摘されている。石器製作技術がレヴァントに特徴的なものであることに加え、中央アナトリアの遺跡からはこうした技術で製作された石器が出土していないこともその根拠とされている。もしそうであったならば、黒曜石製の尖頭器を得るためには、単に交易ネットワークによって遠隔地の希少石材を入手して製作するだけでなく、時に製作者自らが原産地まで遠征するという、さらに大きな労力を投入することもあったということになる。ナヴィフォーム式石刃製作技術のもつ特性 (石材利用効率の低さ) からみて、そうした行動にでた方がむしろ理にかなっていると判断されることもあったのかもしれない。

このように、フリント製、黒曜石製を問わず、尖頭器の製作には石材の獲得に大きなコストがかけられており、目的とする石刃を得るためにはあえて石材の無駄も厭わないという姿勢を読み取ることができる。それだけの労力をかけてまで製作する意味や価値が尖頭器にはあったということになる。

5. 尖頭器のシンボリズム

ここまでみてきたように、PPNB 期を中心とする時期の尖頭器の特徴は、以下のようにまとめることができる。良質なフリントや遠隔地の資源である黒曜石が利用され、それを入手するために大きなコストがかけられている (希少素材の利用)。この時期に盛行するナヴィフォーム式石刃製作技術は尖頭器用の素材の獲得を第一義とするものであり、希少な石材の利用効率をある程度度外視して、入念な作業を経て尖頭器の素材が製作される (製作に大きな労力を投入)。こうして製作された尖頭器は大型化し、装飾性を強めていく傾向にあり (過剰デザイン化)、ほぼ大型化のピークを迎えた段階で突然消失する。こうしたあり方は単なる実用的な道具の場合にはあまり当てはまらず、むしろ祭器や儀器とされるような特別な器物のあり方に近いと指摘することができる⁷⁾。特に狩猟具の場合には、狩りの際に紛失・破損してしまうリスクも高いことから、狩猟具に求められる機能を超えるものに、大きな労力をかける意味があったとは考えにくい。実際、北西シリアのルージュ 2c 期におけるアムーク型尖頭器については、その出土コンテキストなどからも儀器的な様相が顕著になるとの指摘がある (Arimura 2019: 202)。

その一方で、少なくとも新石器時代の初頭には、尖頭器が実際に狩猟具として使用されていたことは間違いないと思われる。小型で石鏃と考えられるものが中心であることに加え、遺跡から出土する動物も野生型であり、ほとんどが狩猟によって獲得されていたと考

えられるからである。そうであるならば、正確に時期を特定するのは難しいものの、どこかの段階で尖頭器の性格が変容し、社会的意味や象徴的意味が付与されるようになったと考えなくてはならなくなる。敢えて挙げるとするならば、ナヴィフォーム式石刃製作技術が出現し、尖頭器の大型化が顕著になり始める、PPNA 期末から PPNB 期初頭ごろが注目される場所であるが、長期に及ぶ漸進的な変化であった可能性もあり、時期についてはあまり限定して考えない方がよいのかもしれない。

PPNA 期など新石器時代初頭の段階で、儀礼祭祀が社会にとっての主要な関心事であり、それと深く関係する大型の建物の建造に多大な労力が注ぎ込まれていたことは、ギョベクリ・テペ遺跡の調査などから明らかになってきている (Schmidt 2011)。PPNA 期の集落においても、ジェルフ・エル・アフマル (Jerf el-Ahmar) 遺跡、テル・アバル (Tell 'Abr) 3 遺跡、ワディ・フェイナン (Wadi Feinan) 16 遺跡など、集落内に公共建造物的な性格を有する特別な建物がみられる遺跡も多く知られるようになってきた (Atakuman 2014)。PPNA 期の集団は基本的には狩猟採集民であったと考えられ、ギョベクリ・テペ遺跡を筆頭に、この時期のシンボリズムにはそうした集団の世界観が表現されている (三宅 2014)。

PPNB 前期から中期にかけて営まれたネヴァル・チョリ (Nevalı Çori) 遺跡から発見された公共建造物が、T 字形石柱、ベンチ、テッラゾーの床面など、ギョベクリ・テペ遺跡と多くの共通する要素を備えているところをみると (Hauptmann 1993)、PPNA 期に発展した儀礼祭祀の体系は PPNB 期になっても、少なくとも南東アナトリアにおいては継承されていたと考えられる。ネヴァル・チョリ遺跡では西アジア最古とされる栽培型のコムギが出土し (Nesbitt 2002)、家畜型のヒツジが確認されるなど (Peters et al. 2005)、農耕牧畜への移行が徐々に進みつつあったことは間違いない。しかし、そうした時期においても、社会の根幹をなす儀礼祭祀の体系はすぐに廃れることはなく、引き続き維持されていたようである。PPNB 期の集落に公共建造物が存在する例はほかにチャヨニュー (Çayönü) 遺跡などでも確認されており、ここでも PPNA 期からの継続性を認めることができる。

PPNB 期において、実際に狩猟に関係する儀礼がおこなわれていたことを示す資料も存在する。アイン・ガザル (Ain Ghazal) 遺跡からは、動物土偶に狩猟具に見立てたと思われるフリント片が刺さっている例が出土しており (McAdam 1997)、これは狩りの成功を祈る呪術的な狩猟儀礼と関連するものかもしれないが、狩猟が依然として主要な関心事であったこ

とを示している。動物土偶は家畜化が進む頃に出現することから、家畜を表現したものとみなされることもあるが、こうしたアイン・ガザル遺跡の事例からは、狩猟の対象となる野生動物を象ったものもあり、必ずしも家畜ばかりではなかったことには注意が必要となる⁸⁾。

ほかに、狩猟関連儀礼の存在を示す資料としては、中央アナトリアの土器新石器時代の事例になるが、チャタルホユック (Çatalhöyük) 遺跡の壁画にみられる「狩猟場面」がある (Mellaart 1966)。場面の中央には、ひと際大きく強調して描かれたウシやシカがみられ、その周囲には獲物を取り囲むように大勢の人物がヒョウの毛皮製と思われる腰巻をまとった姿で描かれている。その中に弓と思われる道具を手に行っている人物がみられることが注目され、そこに矢や尖頭器は描かれていないものの、儀礼的・象徴的意味合いの強い狩猟場面であると考えられることができる。このほか、テペジック・チフトリック (Tepecik Çiftlik) 遺跡やキョシュク・ホユック (Köşk Höyük) 遺跡から出土した土器にも、貼付文によってよく似た狩猟場面が表現されている例があり (Bıçakçı et al. 2012; Öztan 2012)、こうした儀礼的な狩猟は中央アナトリアではその後も継続しておこなわれていたと考えられる。今のところレヴァントや南東アナトリアでは良好な資料は確認されていないが、こうした地域でも同様の狩猟儀礼がおこなわれていた可能性を想定することはある程度許されるのではないと思われる。

このように、PPNB 期において狩猟採集社会からの系譜をひく儀礼祭祀の体系が依然として保持されていた可能性があり、狩猟に関連する儀礼も実際におこなわれていたと考えられる。この時期は動物の管理や家畜の飼育がはじまり、狩猟活動が衰退していく時期に相当する。特に、PPNB 後期初頭には形態的にも家畜と認定できるヒツジやヤギの割合が顕著に増加し、地理的にも広範な地域に広がるのが指摘されている (Conolly et al. 2011)。生業の内容だけをみれば、本格的な農耕牧畜社会が成立したと評価できるかもしれないが、その実態は狩猟採集社会に根差した側面も色濃く残す複雑なものであった可能性がある。

その意味において、新石器時代における尖頭器のあり方は、その時代の社会を理解する上で、多くの示唆を与えてくれる。PPNB 期にまで継承されていた伝統的な儀礼祭祀の体系、あるいはその背後にあるイデオロギーが狩猟採集民社会に淵源をもつものであるならば、その中で狩猟という行為が重要な位置付けにあり、儀礼の催行者や参加者も「狩猟者」であること、あるいはそのように振る舞うことが重要な意味をもっていた可能性は十分に考えられる。尖頭器が大型化し装飾性を強めていくのも、狩猟者としてのアイデン

ティティを表示する役割がより強く意識されるようになり、それを強調していくことが求められた結果であるとも考えることもできる。いささか逆説的かもしれないが、実際の生業が変容していく中で、むしろ狩猟民としての自己意識が高められ、社会を統合する原理としてもより強く働くようになったということがあるのかもしれない。

その一方で、尖頭器は比較的検出される数が多く、出土状況をもみても特別な扱いを受けていたように見える例は少ない。祭器であったとは考えにくい状況があることも確かである。これについては、上述したような状況の中で、儀礼的な狩猟行為も重要性を高めていったと想定することができ、そのような場において大型で見映えのする尖頭器が実際に使用されることもあったのではないかと思われる。したがって、尖頭器が石鏃から槍先に変化したという指摘は確かに興味深い(Borrell and Štefanisko 2016)、尖頭器の大型化は社会的な背景から要請されたものであり、あくまでもその結果として石鏃の範疇を超えるような大きさの尖頭器が出現したと考えられる。必ずしも尖頭器が実際に槍先へと変化したとは考えなくてもよいように思われる。

さらなる勇み足となってしまうかもしれないが、もし尖頭器が社会的な意味の付与された道具であったのならば、大規模集落の解体と尖頭器の消失が連動しているようにみえる現象についても、単なる偶然の一致ではなかった可能性が考えられるようになる。大規模集落を擁するような社会が、狩猟採集民的な儀礼祭祀の体系やイデオロギーを社会統合の原理としていたのならば、そこに大型の尖頭器が存在していたとしても特段不可解なことではなくなる。そうした儀礼祭祀の体系や社会の統合原理が大きく変化した時、あるいは変容せざるを得なくなった時、結果として大規模集落は解体されることになり、存在意義を失った尖頭器もはや製作されることがなくなったと解釈できるようになる。その後の社会に暮らした人々こそ、自他ともに認める西アジア最初の「農耕牧畜民」であったということになる。おそらくこれが「新石器の崩壊」の実態であり、崩壊したのはあくまでも旧時代的な社会システムであり、農耕牧畜社会ではなかったことになる。もちろん、これについては新石器時代の大規模集落の実態解明を進める必要があり、今後の大きな課題であることは認識している。

6. おわりに

本稿では西アジア新石器時代の尖頭器が単なる狩猟具であったのではなく、ある段階から狩猟採集民(あるいは狩猟者)としてのアイデンティティと深く関係

する、社会的・象徴的意味をもった道具となった可能性を指摘した。これを実証するのは難しく、あくまでもひとつの解釈にすぎないことは認めなくてはならない。しかし、尖頭器の変化と狩猟活動の盛衰とが対応していない以上、尖頭器を実用的な狩猟具とだけ考えるのは無理があることも事実である。様々な反論があることは予想されるが、その場合、なぜ尖頭器の製作を第一義とする石刃製作技術が盛行し、尖頭器がなぜ大型化し装飾性を強めていくのか、なぜ大型化のピークを迎えた後突如消失するのか、そうした疑問に答えられるものではなくてはならないと考える。

そして、もし本稿での指摘がそれほど的外れなものでないとするならば、PPNB期の社会(北西シリアでは土器新石器時代の一部まで)は、まだ狩猟者としてのアイデンティティが重要な意味をもっていた時代であると評価することができるようになる。少なくとも、従来のように農耕牧畜の導入によって急激に社会が変容し、新石器時代を農耕牧畜に大きく規定された社会とみなすだけでは、その社会を十分に理解したことにならないばかりか、その理解を妨げてしてしまうことになると思われる。

註

- 1) テル・アレイ遺跡では、試掘調査において先土器新石器時代の層にまで到達することはできなかったが、層位的な状況からみてさらに下層にはルージュ Ic 期の層が存在する可能性が高く、表面採集された遺物の分布範囲からこの時期の集落規模は5-10 ha程度であったと推定されている(Tsuneki 2012: 40)。
- 2) この名称には不適切な点があるとして、「PPN 式対向剝離石刃製作技術」とするべきであるとの意見がある(有村 2013)。その意図するところには賛意を表しつつも、本稿では従来通りの用語を用いることとした。
- 3) tip cross-sectional area の略。
- 4) tip cross-sectional perimeter の略。
- 5) テル・ハルラ遺跡の尖頭器を分析した論考の中でも、狩猟対象獣の変化や狩猟組織の変化のほかにも、狩猟のもつ意味の変化や対人用武器への変化など、様々な可能性が挙げられている(Borrell and Štefanisko 2016: 141)。
- 6) イェリコ(Jericho)遺跡のPPNA期の層から検出された城壁状の遺構はよく知られているが、防御施設ではなく洪水対策用であったと考えられている(Bar-Yosef 1986)。
- 7) 弥生時代の銅鐔になぞらえて言うならば、「狩る石鏃」から「見せる石鏃」に変化したと評価できるかもしれない。
- 8) 中央アナトリアの土器新石器時代の事例となるが、チャタルホック遺跡の動物土偶にも、何らかの道具で刺突された痕跡の認められるものが相当数(約12%)出土している(Martin and Meskell 2012)。ここでも、多くの動物土偶が野生動物を象ったものであることが指摘されている。

参考文献

- Abbès, F. 2003 *Les outillage néolithiques en Syrie du Nord. Méthode de débitage et gestion laminaire durant le PPNB*. Oxford, Archaeopress.
- Arbuckle, B. S. and V. Özkaya 2006 *Animal Exploitation at Körtik Tepe: An Early Aceramic Neolithic Site in*

- Southeastern Turkey. *Paléorient* 32(2): 113-136.
- Arimura, M. 2007 The Lithic Industry of the Early PPNB layers at Tell Ain el-Kerkh, Northwest Syria. In L. Astruc, D. Binder and F. Brios (eds.), *Systèmes techniques et communautés du Néolithique précéramique au Proche-Orient*, 137-151. Antibes, Éditions APDCA.
- Arimura, M. 2019 Last PPNB Blade Maker in the Pottery Neolithic at Tell Ain el-Kerkh, Northwest Syria: The Demise of PPNB-Type Bidirectional Blade Technology. In S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts. Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, 191-204. Tokyo, Rokuichi Syobou.
- Atakuman, Ç. 2014 Architectural Discourse and Social Transformation during the Early Neolithic of Southeast Anatolia. *Journal of World Prehistory* 27(1): 1-42.
- Bar-Yosef, O. 1986 The Walls of Jericho: An Alternative Interpretation. *Current Anthropology* 27(2): 157-162.
- Bar-Yosef, O. 2014 The Homelands of the Cyprus Colonizers: Selected Comments. *Eurasian Prehistory* 10(1-2): 67-82.
- Binder, D. and N. Balkan-Atli 2001 Obsidian Exploitation and Blade Technology at Kömürçü-Kaletepe (Cappadocia, Turkey). In I. Caneva, C. Lemorini, D. Zampetti and P. Biagi (eds.), *Beyond Tools: Refitting the PPN Lithic Assemblages of the Levant*, 1-16. Berlin, ex oriente.
- Biçakçı, E., M. Godon and Y. G. Çakan 2012 Tepecik-Çiftlik. In M. Özdoğan, N. Başgelen and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. Volume 3 Central Turkey*, 89-134. Istanbul, Archaeology and Art Publications.
- Borrell, F. and D. Štefanisko 2016 Reconstructing Projectile Technology during the Pre-Pottery Neolithic B in the Levant: An Integrated Approach to Large Tanged Points from Halula. *Journal of Archaeological Science* 69: 130-142.
- Childe, V. G. 1934 *Man Makes Himself*. London, Watts and Co.
- Conolly, J., S. Colledge, K. Dobney, J.-D. Vigne, J. Peters, B. Stopp, K. Manning and S. Shennan 2011 Meta-Analysis of Zooarchaeological Data from SW Asia and SE Europe Provides Insight into the Origins and Spread of Animal Husbandry. *Journal of Archaeological Science* 38: 538-545.
- Gopher, A. 1994 *Arrowheads of the Neolithic Levant: A Seriation Analysis*. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Hauptmann, H. 1993 Ein Kultgebäude in Nevalı Çori. In M. Frangipane, H. Hauptmann, M. Liverani, P. Matthiae and M. Mellink (eds.), *Between the Rivers and over the Mountains: Archaeologica Anatolica et Mesopotamica Alba Palmieri Dedicata*, 37-69. Roma, Università di Roma "La Sapienza".
- Hodder, I. and L. Meskell 2010 The Symbolism of Çatalhöyük in its Regional Context. In I. Hodder (ed.), *Religion in the Emergence of Civilization*, 32-72. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hughes, S. S. 1998 Getting to the Point: Evolutionary Change in Prehistoric Weaponry. *Journal of Archaeological Method and Theory* 5: 345-408.
- Iwasaki, T., H. Nishino and A. Tsuneki 1995 The Prehistory of the Rouj Basin, Northwest Syria: A Preliminary Report. *Anatolica* 21: 143-187.
- Iwasaki, T. and A. Tsuneki (eds.) 2003 *Archaeology of the Rouj Basin: A Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria Vol. I*. Al-Shark 2, University of Tsukuba Studies for West Asian Archaeology. Tsukuba, Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba.
- Kozłowski, S. K. 1999 The Big Arrowhead Industries (BAI) in the Near East. *Neo-Lithics* 1999-2: 8-10.
- Maeda, O. 2011 The Social Roles of the Use of Flint and Obsidian Artefacts at Salat Cami Yanı in the Upper Tigris Valley. In E. Healey, S. Campbell and O. Maeda (eds.), *The State of the Stone: Terminologies, Continuities and Contexts in Near Eastern Lithics*, 317-326. Berlin, ex oriente.
- Maeda, O. 2018 Lithic Analysis and the Transition to the Neolithic in the Upper Tigris Valley: Recent Excavations at Hasankeyf Höyük. *Antiquity* 92(361): 56-73.
- Martin, L. and Y. Edwards 2013 Diverse Strategies: Evaluating the Appearance of Domestic Caprines in the Southern Levant. In S. Colledge, J. Conolly, K. Dobney, K. Manning and S. Shennan (eds.), *The Origins and Spread of Domestic Animals in Southwest Asia and Europe*, 49-82. Walnut Creek, Left Coast Press.
- Martin, L. and L. Meskell 2012 Animal Figurines from Neolithic Çatalhöyük: Figural and Faunal Perspectives. *Cambridge Archaeological Journal* 22(3): 401-419.
- McAdam, E. 1997 The Figurines from the 1982-5 Seasons of Excavations at Ain Ghazal. *Levant* XXIX: 115-145.
- Mellaart, J. 1966 Excavations at Çatal Hüyük, 1965, Fourth Preliminary Report. *Anatolian Studies* 16: 165-191.
- Moore, A. M. T., G. Hillman and A. J. Legge 2000 *Village on the Euphrates: From Foraging to Farming at Abu Hureyra*. Oxford, Oxford University Press.
- Nesbitt, M. 2002 When and Where Did Domesticated Cereals First Occur in Southwest Asia. In R. T. Cappers and S. Bottema (eds.), *The Dawn of Farming in the Near East*, 113-132. Berlin, ex oriente.
- Nishiaki, Y. 2000 *Lithic Technology of Neolithic Syria*. BAR International Series 840. Oxford, Archaeopress.
- Nishiaki, Y. and M. Le Mière 2005 The Oldest Pottery Neolithic of Upper Mesopotamia: New Evidence from Tell Seker al-Aheimar, the Khabur, Northeast Syria. *Paléorient* 31(2): 55-68.
- Öztan, A. 2012 Köşk Höyük. In M. Özdoğan, N. Başgelen and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. Volume 3 Central Turkey*, 31-70. Istanbul, Archaeology and Art Publications.
- Peters, J., A. von den Driesch and D. Helmer 2005 The Upper Euphrates-Tigris Basin: Cradle of Agro-Pastoralism? In J. D. Vigne, J. Peters and D. Helmer (eds.), *The First Steps of Animal Domestication: New Archaeological Approaches*, 96-124. Oxford, Oxbow Books.
- Quintero, L. A. and P. J. Wilke 1995 Evolution and Economic Significance of Naviform Core-and-Blade Technology in the Southern Levant. *Paléorient* 21(1): 17-34.

- Schmidt, K. 2011 Göbekli Tepe. In M. Özdoğan, N. Başgelen and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research. Volume 2 The Euphrates Basin*, 41-83. Istanbul, Archaeology and Art Publications.
- Shea, J. J. 2006 The Origins of Lithic Projectile Point Technology: Evidence from Africa, the Levant and Europe. *Journal of Archaeological Science* 33: 823-846.
- Tsuneki, A. (ed.) 2011 *The Life and Death in the Kerkh Neolithic Cemetery*. Tsukuba, the University of Tsukuba.
- Tsuneki, A. 2012 Tell el-Kerkh as a Neolithic Mega Site. *Oriens* XLVII: 29-65.
- Tsuneki, A., M. Arimura, O. Maeda, K. Tanno and T. Anezaki 2006 The Early PPNB in the North Levant: A New Perspective from Tell Ain el-Kerkh, Northwest Syria. *Paléorient* 32(1): 47-71.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, M. Arimura, S. Nishiyama, H. Sha'baan, T. Anezaki and S. Yano 1998 Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura and S. Sekine 1997 First Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1997), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Hudson, M. Arimura, O. Maeda, T. Odaka and S. Yano 1999 Third Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20: 1-32.
- 有村 誠 2013「西アジア新石器時代における PPN 式対向剥離石刃製作技術の研究」『旧石器研究』9号 43-60頁。
- 安齋正人 2008「過剰デザインの石槍」佐藤宏之（編）『縄文化の構造変動』77-92頁 六-書房。
- 小高敬寛 2009「西アジア新石器時代の倉庫址—テル・エル＝ケルク遺跡の事例—」西秋良宏・木内智康（編）『農耕と都市の発生—西アジア考古学最前線—』47-60頁 同成社。
- 筑波大学シリア考古学調査団（編）1991『エル・ルージュ盆地における考古学的調査 I』筑波大学歴史・人類学系。
- 筑波大学シリア考古学調査団（編）1992『エル・ルージュ盆地における考古学的調査 II』筑波大学歴史・人類学系。
- 筑波大学シリア考古学調査団（編）1993『エル・ルージュ盆地における考古学的調査 III』筑波大学歴史・人類学系。
- 野澤 謙・西田隆雄 1981『家畜と人間』出光書店。
- 藤井純夫 1996「西アジアの戦いの始まり」国立歴史民俗博物館（編）『倭国乱る』140-143頁 朝日新聞社。
- 本郷一美 2018「家畜化は肉食に貢献したか—狩猟から牧畜への肉食行為の変化」野林厚志（編）『肉食行為の研究』187-211頁 平凡社。
- 前田 修 2010「西アジア新石器時代における黒曜石研究の新展開」『西アジア考古学』11号 67-79頁。
- 三宅 裕 2014「西アジアの新石器時代—農耕・牧畜と社会の関係」筑波大学西アジア文明研究センター（編）『西アジア文明学への招待』90-103頁 悠書館。
- 三宅 裕 2017「揺らぐ新石器革命論—農耕・牧畜の起源と新石器時代の社会—」『季刊考古学』141号 33-36頁。
- 和田久彦 1987「ビブロス型尖頭器とイェリコ型尖頭器 その成立と展開をめぐって」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』6号 1-45頁。